

ネバリ・バザー口



だより



第 17 号

ベルダレルネーヨ通信

1998 年 6 月

ネバリ・バザー口は、ネパールを中心としたアジア諸国のハンディクラフト製品や食品の企画、開発を行い、継続的に輸入を続けることによって就業の場の拡大をめざすフェアトレード団体です。立場の弱い人々、女性、子どもの自立を支援し、貧困の課題改善に取り組めたらというのが私たちの願いです。母体となるボランティア・グループ(NGO)であるベルダレルネーヨ(ネパールの女性の自立と子どもの育成支援の会)のトレード部門として1992年から活動しています。

1998年2月からは、地球市民かながわプラザに直営店「ベルダ」をオープンして第三世界からの品々をご紹介します。



ヤクを連れた山の民・・・阿部修さん画

目 次

<特集>生産者と消費者の橋渡し

「フェアトレードショップ座談会」

・・・ 2

「IFA T 情報コーナー」・図書紹介

・・・ 5

「生産者をたずねて」その6

ー共同組合組織のコーヒー村グルミー

土屋完二・・・ 6

「4度目の村訪問記」パート2

久田智子・・・ 8

新人紹介・サポート最新情報

・・・ 11

お知らせ・編集後記・・・ 12

フェアトレード商品と生産者の関係

数年前までは馴染みの少なかったフェアトレードでしたが、最近では全国各地にフェアトレードの商品を扱うお店が増えてきました。より一層発展途上国の人々の自立を応援したいという共通の思いで、それぞれのお店がネパリ・バザールなどのフェアトレード団体から商品を仕入れて、お客様に生産国や生産者の様子を直接伝えています。今回は、フェアトレード商品を扱う小売店3店の方たちに、店を通じて見えるフェアトレードの現状、商品や生産者への思い、今後の展望について語っていただきました。(本文敬称略)

<参加者>

小島 美佐さん(ぐらする一つ代表)

和田 美恵子さん

(ちえのわハウス運営スタッフ)

土屋 春代(ベルダ店長兼ネパリ・バザール代表)

司会: 福田 博(ネパリ・バザールスタッフ)

司会: フェアトレードショップとしてお客様の状況や反応はいかがですか？

小島: 「ぐらする一つ」を作った目的は、不特定多数の人が行き来する場所に国際協力の店を置くこと。買って下さるのは1日に30

~40人で、その10倍以上の方が覗いてくれています。国際協力を意識せずにいらした方も、お渡しした資料などを読んでくださって、2度目の来店につながっているようです。



小島 美佐さん

ぐらする一つ 代表

<池袋店> 池袋サンシャインシティ

ワールドインポートマート6F

TEL 03-3987-8482

<渋谷店> 渋谷区宇田川町4-10

ゴールデンビル1F

TEL 03-5458-1746

和田: うち
は、国府津の
商店街でも
端の方で、遠
くからわざわざ
人が来る場所でも
ありません。

5年前の開店当初は、出資に協力して下さった80名の方々の応援で支えられていました。けれど、近所の方も牛乳や豆腐など日々の食品から関わりが始まったのをきっかけに、フェアトレードにも関心が向いてきています。フェアトレードの店が普通に通用するようになってきました。

土屋: 「ベルダ」は、本郷台駅前とはいえ横浜のはずれで、来客数が不安でしたが、1日40人ほどが買い物をしてくださいます。たいていは、買い物のためではなく、他の催しのために来館した方ですね。フェアトレードに関心のない方にも、看板を工夫したら少し伝わりやすくなりました。

司会: フェアトレードを知っている人は少ないですか？

小島: 目的を知って買い物をしてくれる人は1、2割でしょう。それでも、池袋店ではアンケートで4割の人がどんな店だかは知っていました。強い意志で参加するのでなくても、認知度は根付きつつあります。

司会: 実際に買う客は、フェアトレードだから買うのでしょうか？

小島: フェアトレードよりも「商品」ですね。

和田: どうせお金を使うならこの店で、と応援してくれる人もいますが、それでも、商品に納得いかなければその後に続きません。品物の魅力は本質的なことですから、フェアトレードだからミシンが曲がっていてもいいと



和田 美恵子さん
ちえのわハウス 運営スタッフ
小田原市国府津3-14-3
TEL 0465-49-6045

いうわけにはいきません。

土屋:趣旨をわかって
いる人ほど、生産者に
良かれと思って厳しい
指摘をしてくれます。
お金を出して買う以上
当然のことですよ。

司会:売れる
商品の特征や
条件は何なの
でしょう？

小島:一般的
な傾向は、日常

的に使える物ですね。飲むもの、食べるもの、
使えるものから売れますし、リピーターもつ
きやすい。でも、売れると思ったものが売れ
なかったり、どうしてこれが、というものが
当たることもあります。デザインや素材の存在
感なのでしょうね。

和田:ぐらする一つのような都会の店は、面
白いもの、かわいいものが売れるのかと思っ
ていました。

小島:いえいえ、財布の紐は堅いです。

和田:うちと同じで驚きました。

小島:ネパリ・バザール口の「幸せを呼ぶふく
ろう」のヒットの原因は？

土屋:ふくろうは、集めている人も多いので、
ふくろう自体の魅力でしょうか。

司会:実用性だけでなく、伝統文化に根ざし
た物語があるというのも価値があるのでは？

小島:フェアトレードの概念だけでなく、生
産国の伝統・文化・暮らしぶりも伝えたいで
すね。実用性だけでは味気ない。ネパールの
コーヒーが売れるのも、ヒマラヤの風景を彷彿
とさせたり、珍しいものを飲みたいという、
お客様の心理もあります。

土屋:質の良いことは絶対で、その上に精神
的な部分ですね。

和田:でも、質の良さだけでは継続的には売
れません。彼らが本来作ってきたものだけで

なく、製品を広げていく必要もあるので
は？

土屋:まさに、それが私たちが協力できる
部分ですし、生産者の求めていることです。
一つの商品も売れて数年。売れている間に
次のものを開発しないといけません。日本
のマーケットを知っている私たちが、現地
の材料や技術に合ったアイデアを提案して
いけないといけません。

小島:商品開発には2通りあると思いま
す。ひとつは、日本の流行に追いつくための
もの。もう一つは、素材などもともと持って
いる価値を生かすもの。質の違いが、量産品
に疲れた日本人に受け入れられることもあ
ります。

土屋:ただ、そのまま日本に受け入れられ
るものでも、向こうには当たり前のこと
だったりするので、価値のあるものだと伝
えないとわからない。彼ら自身気づいてい
ない宝の持ち腐れになっているものもあり
ます。

小島:日本のマーケットを知るものとし
て、伝えていく義務がありますね。

土屋:商品開発も、外国で考えたデザイン
をそのまま作らせる大きなフェアトレード
団体もありますが、
現地で相談して決め
ていきたいですね。

小島:バランスの
問題で、そういう面
も必要でしょうが、
ノウハウを蓄積した
大きなフェアトレ
ード団体と違い、小規
模の私たち

は、むしろ
規格品でな
い新しい形
の商品開発、
つまり共同
開発が必要



土屋 春代
フェアトレードのお店「ベルダ」店長
兼 ネパリ・バザール代表
横浜市栄区小菅ヶ谷町1-2-1
地球市民かながわプラザ2F
TEL 045-890-1447

ですね。

和田：それでも、客によっては、エスニック色の強いものは生活に合わない人もいます。伝統を失うのも怖いけれど、輸出先のニーズに合わせて変えていく必然性も、経済的發展のためにはありますよね。

小島：バランスですね。売れるものを作るのも大切ですけど、完全にデザインを決めて注文すると、フィリピンのももバングラディッシュのもも、同じ匂いがしてきます。きれいであか抜けているけれど、よく見るとどの国のものも同じという不自然さが出てくる。

和田：デザインだけでなく、縫製などの技術面も問題になりますよね。

小島：気を使う部分が日本人と違ったりするので、ポイントをきちんと伝えないとダメですね。言えばわかって、要求がないから気を使う必要を感じなかったりします。

土屋：国によっても要求の内容は変わってきます。丁寧に作ると「質は良くなっていいから、値段を下げろ」と言われた生産者もいたようです。

小島：客の要求を集められるのは、客と直接関わっている小売店。いかに還元して卸元であるフェアトレード団体に伝えられるかで、生産者のモチベーションも変わりますよね。

土屋：今回ネパールで気づいたんですけど、竹で編んだカゴの足の長さが合わずにカタカタすることを、作っている村に伝えないとと思ったんですが、作っている村はボカラから歩いて3、4日かかる、電気もない村で、そこに平らなところがあるのだろうか…。斜面に建



ちえのわハウスのお菓子を食べつつ、話は進む・・・

てられた昔ながらの土間の家では問題ないのでしょう。日本の暮らしに合わせるように、どう指導すればいいのか・・・現実はそのような世界。

司会：お店でもお客様にそういう話を伝えると、愛着を持ってもらえるのでは？

小島：そうなんです。こぼれ話のようなそういう話がいいんです。

和田：セーターにワラが入っていることがあるんですよ。でも、わかりました。向こうは土間で、電気もなく暗いし、ワラや髪の毛を編み込んでわからないのですね。そういうことを知っていると、私自身は気分悪くなく、かえって編み手への愛しさが出てくるけれど、お客様はどう感じるのでしょうかね。

小島：お客様にもそうした思いを持ってもらえるよう、「話す」ことに力を入れています。スタッフの一人は「話す」ことに専念するようにして、フェアトレードのこと、生産者のことを伝えるコミュニケーションを大事にしています。先ほどのような商品企画のこぼれ話をもっともらって、お客様に伝え、顔の見える関係にしていきたいですね。

司会：最後に、今後の目標をお聞かせください。

和田：自分はまだまだ勉強不足。もっと学んで、力をつけて大きくなっていきたいですね。フェアなトレードが当たり前になるように。

小島：これまでの3年間は立ち上げとしてがむしゃらにやってきましたが、これからは長いスパンでやれることを考えていきます。自分たちの組織だけでやれることは限られるので、全体として発展するには何ができるのか考えていきたいです。

土屋：地域に根付き、多くの方にフェアトレードを理解して欲しい。行政の建物に店を置かせてもらえたが、儲かる商売ではないので、こうした形でフェアトレードの店がもっと増えて欲しい。そのためには、自分たちが成功例にならないと。

(記録・編集：魚谷早苗)

IFAT 情報コーナー

(INTERNATIONAL FEDERATION
FOR ALTERNATIVE TRADE)

通信 16号で、フェアトレードの流れをご紹介しました。そこに書かれているフェアトレード推進役を担う IFAT は、大方、45ヶ国 100 団体が加盟する世界的組織で、フェアトレードを力強く推し進めている団体です。

今回は、その目的、会員の資格や、現在の課題、そしてアジアでの国際会議の動きを紹介します。

目的は、貧しく圧迫されている開発途上国の生活改善のために、そして、国際貿易の不公平な構造を変えていくことです。会員としては、南の生産者と、北と南のオルタナティブ組織の同盟で、これをメンバーと呼んでいます。このほかに、輸出入に直接関係しない団体やプレスなども、IFAT の目的に賛同する団体であればオブザーバ資格(投票権がない)で、会議に参加したり、会員として参加することができます。

現在の課題は、フェアトレード性をどのように評価し、格付けしていくか、そのための審査

体制の確立や、査定方式の評価、そして、この理念実現に向けて共通ロゴマークを導入するなどがあります。現在は、その幹事国を英国に移しています。年一回の年次総会は、欧州で 4 月から 5 月にかけて開催され、秋には地域会議が各 5 大陸で夫々行われることになっています。

年一回の年次総会は、基本的に欧州中心ですが、例外的に日本の参加も期待されています。

その他、2 年に一回の国際会議があり、この時は、地域を越えて、各会員が一同に会して意見交換や会議が行われます。その際に、各種ワークショップや展示会も開催されます。

今年の地域会議は、11 月初旬にネパールで開かれます。私たちとお付き合いのあるフェアトレード・ネットワーク (FAIR TRADE GROUP in NEPAL) がそのホスト役を務めます。



ネパールの FTGN 事務所の入り口風景

< インターネット ホームページ >

ネパリー・バザール/ベルダレルネーヨのホームページでは、ネパールのこと、フェアトレードのことなど詳しい情報をお届けしています。

<http://www.yk.rim.or.jp/~ngo/>

< 図書のご紹介 >

「行ってみようあのお店：

フェアトレードの本」

発行：ネパリー・バザール 定価：509 円

「フェア・トレード：

公正なる貿易を求めて」

発行：新評論

著者：M. B. ブラウン

翻訳：市橋秀夫・青山薫 定価 3,000 円



原書



翻訳本

生産者を訪ねて その6

共同組合組織のコーヒー村 グルミ 小規模農家の村人たち

土屋完二

新しい出会いを求めて

マーケットが見つけれられず困っている農民の方々との出会いから始まったコーヒーの輸入であったが、そのころから数年が経った。まだまだ私達の力も弱く、前途多難である。それでも、そのやる気を支えてくれるものは、農民の方々やそのご家族、そして、それを支えて頑張っている方々との出会いである。今回は、ネパールでは比較的新しい形である組合組織を通じて、小規模な村のコーヒーの状況を知るために、グルミの村を訪ねた。



バ'ラツカ・バ'ザ-ルにお住まいのビムさんとコーヒーの苗木

共同組織の繋がり

National Cooperative Federation
Center Cooperative Federation
Districts Cooperative Federation
Primary Cooperative Federation
(Gulmi, Pulpa, Japa)

夜行バスの旅

目的地は、かなり山の奥にある。首都カトマンズからは、西の方向で、距離は観光で有名なボカラよりやや遠いブットワールまでまず行かなければならない。車をチャーターするには、私の貧乏な旅では支払いに堪えなく、地

元の方々が利用する夜行バスに乗ることにした。バスの切符はネパール語、数字もネパール文字。席は予約制なのだが、自分がどこに坐って良いかさっぱりわからない。窓は閉まらないし、座席の間隔も狭く窮屈で寒い。バスの中は、英語は聞こえない。何をしゃべっているのか、断片的にしか理解できない。途中のバス停から若い男性が乗ってきたかと思ったら、車掌とどなり始めた。後部座席からヤジが飛ぶ。どうもお金がないようで、払わなければ降りろと言っているらしい。そこを何とか乗せて欲しいと交渉しているようだ。

このようにして、夕方、カトマンズのニューロードを出発したバスは、翌朝5時に目的地に到着。外はまだ真っ暗であった。まずは、知り合いの家で休養をとらせてもらい、地元の案内の青年が来るのを待つことになった。

バスを諦めてランドクルーザーで

朝、日が昇るとすこぶる暑い。そうだ、ここはネパールでも南の端である。人々の顔つきも、ラマ族やチベット系の人々、またはネワールの人々のように、どちらかといえば日本人に近い顔立ちが目立ったカトマンズとは違い、インドを思わせるアーリア系の顔立ちが多い。服装からもインドの影響を感じる。短期滞在の私にとっては、あまりのんびりしているわけにはいかない。村の案内の青年が来たところで、これからの計画を打ち合わせる。

今回は、極力ローカルの交通機関を使いながら、とにかく歩くのを基本に計画したが、その計画はすぐさま変更を余儀なくされた。主要道路でバスを待つのだが、なかなか止ってくれない。これでは、時間がとまかく無駄である。なんとかバスを捕まえて、近くの大きな町、ブットワールまで出て、そこでランドクルーザーを探すことにした。道がハードで、普通の車では走れないからだ。時間は、既に昼近くになってしまった。とほほ。夕方出発できればラッキーなほうかもしれないという状況になって来た。実際には、大変幸運にも1時間後

に車をチャーターでき、出発することができたのだが。ポカラ方面に2時間ぐらい走り、タンセンの町で山側に入る。ここから数時間、更にガタガタ道を走り続ける。

日も暗くなって来たころグルミの村へ到着。あまりの揺れに、胃の調子が悪い。腹の調子も夜行バスのせいか調子が悪くなってしまった。

バザールのホテルで、お互いの夢を語り合う

村では、数人の若者が待っていてくれた。村の共同組織に所属している人達である。日も暮れて真っ暗になった夜道を、彼らの家を訪ね、挨拶を済ました。何故か子どもがまだ5ヶ月から8ヶ月の新婚の方が多かった。

家に着くと、赤ちゃんをチュウチュウとなめる。可愛くて仕方がないのだ。

食べ物は大変に質素である。それでも、泊まれと誘われたが、トイレに弱い私は遠慮してしまった。明日は朝早く出発しなければならないので、一路、近くのバザールへ行き、ホテルに泊まる。二人が泊まれる部屋があり、二人で食事もして800円。おー安い！山の高いところなので、2月末にしては、大変寒い。具合が悪くて寝ていると、皆が心配して、食事とアルコール(ロキシ)を持って訪ねて来てくれた。この夜道を車で10分は走った遠いところからも来てくれたのには驚いた。

同じ部屋に泊まった案内の青年は、更に山の中へ行かねばならないところから来ている。彼は、村で暮らしたいという。だから、生活が成り立つのが彼の願いだそうだ。なかなか英語では通じない。村の方は、あまり英語ができない。

そこで、ネパール語をミックスする。いや、ネパール語に英語をミックスするという感じ。昨年の9月からネパリ・バザール口のスタッフから習い始めたネパール語が大変に役立つ。ロキシを飲みながら、お互いの夢を語りあう。

ダウラギリとアンナプルナの山脈を背景に翌朝、村の案内役として農協のサブオフィースからビムさんが来てくれた。彼は、村の高校を卒業。そこで習った英語と、その後に独学で勉強した英語で私に話しかけてくる。読み書きや、長いフレーズで話すことはできないが、簡単な言い回しだと十分にお話ができる。大変な勉強家だ。

お茶を飲んで、車に乗りひとつ先のバザールまで行く。そこは、学校がすぐ前にある小さな街であったが、8,000m級の山々、雪化粧のダウラギリ、アンナプルナが良く見えて壮観である。昨晚、ホテルを訪ねてくれた青年がここに住んでいた。学校の先生をしているという連れ合いと、5ヶ月になるあかちゃんとの3人暮らし。バザールの角の小さな土間の一部屋に、質素なベッドがあり、簡単な料理をする器具が少し。それでも、私にベッドへ座るように薦めてくれ、村で飲むという自分達で作った村のコーヒーを出してくれた。

ここで休息した後、少し先まで行き、あとは歩いて山を下る。そこが、目的のコーヒープレースである。

コーヒーとフェアトレード

以後、さまざまな出会いや、プランテーションでの新発見などがあった。その中でも、力を入れようとしているものは、換金作物である。コーヒーは、その中でも有力な作物。でも、なかなか安定したマーケットを見つけられない。特に、今年は、お隣のインドのコーヒー生産量が豊富なので、なおさらである。このような状況下で、一部の大流通会社が市場の大半を握るコーヒー市場において、特に小規模生産者に対する私たちの取り組みは、力関係が対等故に歓迎されている。この持続可能な取引から、中長期的な村の開発を可能にし、生活向上につながって欲しいと願わずにはいられなかった。そして、ヒマラヤンワールドの香りを通じて、皆様に少しでもこの出会いをお伝えできたらと願いつつ。

4 度目の村訪問記 パート2

感動と教訓、そして涙・・・

久田智子

* 前回到続いて、久田さんの村訪問での感動と涙の報告をお届けいたします。

アルボット村での変化の一つは、診療所が4月から運営し始めたこと。他村出身の看護婦が常駐し、村人のケアにあたっている。

小さな家を改築して始めたものだが、8ヶ月間に約700人が利用している。主な症状は下痢や発熱、頭痛や咳などで、乳児から老人まで幅広く利用されている様子がわかった。

決して物資は豊かではないが、何もなかった頃を思えば村人にとっては大切な場所であり続けて欲しい思った。

一方、小学校には大きな変化はなく、生徒約150名が在籍しているが家の手伝いで来れない子も多い。

始業時間になるとムシロとノートを片手に、どこからともなく子ども達が集まってきて各々の教室に入っていく。

あわてて宿題をやる子、悪ふざけをする子、小さな妹や弟のお守りをしながら勉強に来る子など様々である。

机や椅子がない為、持参したムシロに座り地べたでノートを書いている。

それでも彼らの瞳は生き生きとしていて、あどけない表情がとても印象的だ。

工夫と努力の村人たち

電気のない村でのランプの生活はとても温かみがある。夕食が終わったら「おやすみ」という生活で静寂の中、木の葉が落ちるカサカサという音に耳を傾けながらいつしか眠りの世界にひきずり込まれていく。

すごく大きな世界の中に、小さな小さな自分が存在しているという不思議な感覚に陥っていく。この生活の中にも一つの開発があった。家畜の糞を溜め、地中に埋めたタンクの中にガスを発生させ、それをパイプで流して

ランプに利用するのである。

それまでは油を使用していた為、すすで額や鼻の穴が真っ黒になっていたのだが・・・。

それにしても村人の知恵は、果てし無いものだと感じさせられた。

向かいの村、トロパシエルへ

二日後、対岸のトロパシエル村へ向かう為再びスンコシ川まで下山し、これまた危なっかしい丸木舟に命を預けて川を渡り、ふた山越えてひたすら歩き続ける。しかし今度は真昼間なので怖いものなし。名誉挽回とばかりに、息をあげているP.K.さんを尻目にスタスタと登る現金な私であった。

トロパシエル村では校舎が増え、さらに郵便局と図書館を兼ねた建物を建築中だった。

生徒たちはバレーボールをしており、体力作りの為体育の授業も加わったそうである。

生徒数は約800人で高校まであり、遠くの村からも学べるよう寄宿舎も利用されている。

夜間には、村の女性や就学前の子ども達の為に識字教室として利用され、優秀な生徒に対しては小学校でのとび級により勉学の道を開いている。

家事や育児のため勉学の機会を逸していた女性にとって、意味のある企画であると思う。また就学前の子ども達には、共通のネパール語を教え同じレベルで学校の授業が受けられるようにしている。



村への荷物を運ぶ少年たち

というも、ネパールには部族の言葉がいくつも存在しているため、学校で使われる共通のネパール語が分からないといえないのである。村の教育レベルが低いことの一つの理由に、この部族間の言葉の壁があげられており、多部族の村である程レベルアップが難しいという。

その点この村は、ラマ族とブラーマン族が中心である為、ここまで発展することができたというのがP.K.さんの見解である。

しかしそれ以上に私が感じたのは、P.K.さんを含む村の青年たち(20～40代)20人が集まって作っているグループ(Rural Social Development Association of Nepal)が、村の開発の為に様々な努力をしていることである。(彼らの多くは村の出身であるが、現在はカトマンズで各自仕事を持っている。)

前回訪問時、この村の発展ぶりを手放しに喜ぶことができなかったのは、「ここだけがこんなに進歩してしまって大丈夫なのか?周囲の村との格差はどうなるのか?」と感じたからであった。

ところが今回P.K.さんにあらゆる疑問をぶつけ、彼らの目指している事、考えている事を実際に見聞きすることで私の誤解はとけ、感動の涙に変わったのである。

村は着実に前進している

4年前(1994)初めて村を訪れた時、P.K.さんは村の発展の為には教育と医療が必要であると熱く語ってくれた。その翌年(1995)オランダの支援で診療所が建てられたが、常駐して働く医療者がいなかった。看護婦として来てほしいとの誘いに内心やりたい思いはあったが、私が出来なくなった時途絶えてしまうことを考え、やはりネパール人が村の為にやるのがベストだとの思いを伝えた。学校には校舎が増え、簡素なトイレが設置されていた。2年前(1996)診療所にはネパール政府の援助でヘルスアシスタント(医師と看護婦の間の資格をもつ)が常駐するようにな



学校の前で歌を聞かせてくれた子どもたち

り、村人の利用も増えていった。

またアイキャンブ(眼科チームが年一回村々を巡回訪問するプロジェクト)も行われ、少しずつ村人の健康面もフォローされるようになってきた。

そして学校には寄宿舎が建てられ、さらにはソーラー発電を利用して電話もひかれ国際電話すら可能になっていたのである。

これ程の発展の陰に彼らのグループが大きな役割を果たしている事を、今回改めて知ることができたのである。'教育と医療'を中心に、彼らは話し合い、村の問題をひとつずつ解決してきたのだ。

水道を作り学校を建て、診療所を作り電話をひいた。そしてその都度メンバー4～5人が村を訪れては村人たちに説明し、理解と協力を得ていったのである。

それと同時に資金を得る為、政府や国際NGOに企画書を提出し働きかけていったのだ。電話については、こんなエピソードも聞かせてくれた。

文明の利器で広がる世界

これはメンバーがお金を出し合って提供したそうだが、初めてソーラーとアンテナ、電話機を持って村へ行ったら摩訶不思議な機械に村人が群がり、三日間は大騒ぎだったそうである。何度説明しても理解できない様子に、実際にカトマンズにいる息子と話ができるという事実を体験させることでようやく納

得したとの事。

この電話の設置により、ニュースが伝わって情報量が増え村人の教育になっていること、もう一つはポーターなどの仕事を探す為にいちいちカトマンズまで行かなくても電話一本で可能になったことが大きなメリットであるといっていた。

また診療所にはヘルスアシスタント（男性）の他に管理補佐する人、家族計画を指導する女性（日本でいう助産婦）が増員されていた。特に家族計画の面では、指導対象が若い女性である為に羞恥心が先立つというデリケートな部分を考慮し、女性を起用したそうだ。

着実に前進している様子が見て取れた。

ほかの村へも波及効果

カトマンズへの帰路で立ち寄った村で、さらに感銘を受ける出来事に出会った。

「見て欲しいものがある」と言われ、ロッジの裏山へ連れて行かれた。細い道を登っていく途中の足元にそれはあった。

深さ3mはある貯水槽に山からパイプで水をひいて溜めてあるのだが、トタン板がのせてあるだけでその横を大人も子どもも牛も行き来するのである。

危険と隣あわせの状況の中、村人はこの貯水槽から農業用水を運んで畑に使用しているのだ。彼らのグループが今年（1998）の企画について話した際、トロパシエル村にシャワー設備を作ろうという案があったそうだ。

しかし、話し合っていくうち、この村のことが出され「我々の村には水道があるが、あの村にはまだ水道さえもない。この際あの村に水道を作ってあげよう」ということになった。

そして、彼らの支援により村人たちが話し合い水道作りの計画を立て、ネパール政府の援助も得られることになっている。

これは彼らの地道な努力と誠意が着実に実を結び、評価されている証拠であると受け止めた。

村人の本当に欲しいもの

その晩P.K.さんから「私達が一番欲しいのは、お金や物ではない。専門的な知識やアイデア、そして国際的な考えだ。視野を広げることには大切だと思う。是非協力してほしい」さらには「こうして遠い日本からネパールの小さな村の為に、一生懸命考えて来てくれること、それがすでに村人にとっては教育になっている。自分達も村の為にできることをしようという気持ちになり、励みになっている」と。

この言葉で、4年間手探りでできたことが、ようやく手応えとして返ってきた気がした。

私なりの村やネパールとの関わり方の糸口を掴むことができた。

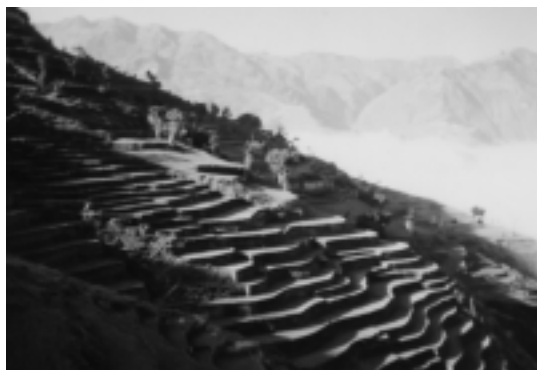
村人が中心になって村の為に努力することこそ、本当の自立への道だと思っていたから。

こうしてトロパシエル村が中心となり、その周囲の村々へ波及していくことが望ましい形なのかもしれない。

サバイバルであった反面、たくさんの感動と教訓を得た涙・涙の旅であった。

しめくくりの乾杯のロキシ（ネパールの地酒）にすっかり酔いしれ、ロッジの階段を再びP.K.さんに手を引かれながら登るはめになったのはちょっぴり情けなかったけど、心の中は温かいもので満たされた思いであった。

（完）



山の畑（田？）は全て段々です

突然ですが

あっ、この人新しいのコーナー 実録 フェアトレード最前線

ネパリの新人 福田 博

出会い

フェアトレードという言葉を知ったのは確か、1992年のことだったと思う。何かの本で第3世界ショップについての記述を読んだ。単純に国際協力と言えば、国連とか国際協力事業団ぐらいしか思い浮かばなかった自分としては、まさに目から鱗、頭の上に電球が点灯のような驚きだった。

その頃海外で仕事をしてみたいと専門商社にいた私は、紆余曲折を経て1998年1月にネパリ・バザー口に潜り込むことになるのだった。

現場

ネパリでは営業を担当。民間企業で働いていたとはいえ、流通業は未知の世界。しかも主力商品は衣料や雑貨なので、アパレル用語

.....

ベルダレルネーヨの

サポート最新情報

太田昌治

1998年4月29日から5月5日までカトマンズに滞在し、従来から行っているホームの支援をはじめ学校の現状、子供の状況などを見てきました。

1 ホームの近況(ビシュヌホーム)

親や兄弟の居ない子らが暮らすこのホームに今年も2人が増え、1人が出ていき現在は50人の子供たちになりました。

このホームを支えているビシュヌ夫妻も子どもたちも皆元気で、ノンビリ休んでいました(伺った日は土曜日で、ネパールの休日)。

この間まで体調が悪かったスニタちゃんもすっかり元気になり、最年少のウジャール君を可愛がって遊んでいました。

を覚えることから仕事は始まった。お取引先の方は皆さんが店長なので、いってみれば全員が一国一城の主。皆さんそれぞれが強烈な個性とパワーを秘めておられ、圧倒されることしきりの毎日だった。しかし、皆さんとにかくやさしい。行く先々でお茶とお菓子と頑張ってるねの励ましの言葉を頂いた。

なんのために

フェアという言葉は日本人にとって刺激的だと思う。それは、アメリカから常に日本はアンフェアと言われてきたから。フェアトレードと言われる場合、多くの企業の方は「俺達はアンフェアだと言うのか。」と反感を感じると思う。私も同じ事を思った。しかし、私たちが目指しているのは他人を非難することではない。私はフェアな社会というのは、皆が公平に機会を得ていることが条件だと思う。機会を創る、それが私の思うフェアトレードです。

2 バルナムーナの状況(ブワン君)

この学校ではブワン君に奨学金や生活支援をしています(今年ミラちゃんは転校しました。次項)ブワン君は、背も伸びて大分お兄ちゃんになりました。学校は教室や外回りがきれいになり、今、生徒は200人、先生16人、全部で13クラスの規模です。

3 ミラちゃんの新しい学校

この4月からミラちゃんは新しい学校に替わりしました。家から少し遠いけどスクールバスで元気に通っています。

学校は、施設も整い先生も熱心でコンピュータやビデオでの授業もあるとか。ささやかながら給食調理場もありました。生徒は80人、先生12人、1クラス10~12人で15人限度だそうです。

フェアトレードのお店 *fxfx* は楽しいイベントが満載です!!

fxfx では、国際協力やフェアトレードについて共に考えていくために、また、協力の対象となっている国々の文化的すばらしさをご紹介しますために、様々なイベントを行なっています。

アルチャナさんとアニールさんの

ネパール伝統舞踊

2月21日(土)

数度の優勝の経験を持つ20歳のアルチャナさんが、ネパールにいても見る機会の少ない伝統的な舞踊を披露。



インド更紗・布たちのおしゃべり

～染織工芸と職人たち～

7月12日(日)

インドで職人と共に伝統的な染織を再現した伊豆原女史から、インド染織の素晴らしさ、職人たちの現状についてお聞きします。

夏を楽しむ!!

タイ料理教室

6月7日(日)

無農薬のハーブ&スパイスを使って、ホットなタイ料理をマスター。



親子で挑戦

ネパール料理教室

8月23日(日)

夏休みを利用して、親子でネパール料理を作りましょう。

ネパールの働く女性たち

～家庭・仕事・自立～(仮題)

9月27日(日)

研修で来日中のロヒニさんから、女性の目から見た、働く場としてのフェアトレードについてお聞きします。

* 詳しくは、ネパリ・バザーロまたはベルダにお問い合わせください。



ネパール訪問中。
開発で大忙し。(春代)



最近何かと忙しく家にいないので、
愛鳥ピースケ君はストレスたまり気味です。(早苗)



ショップにかなりエネルギーを取られて、まだ調子ができません。
早く調子を戻したいなあー。
(完二)



一年ぶりにネパールを訪問して来ました。
カトマンズの排ガスの多さに辟易でした。(洋子)



2年4ヶ月ぶりのカトマンズは停電も無く雨が毎日降りました。
(昌治)



連日の猛暑、暑いのは好きなのですが、やっぱり街中のコンクリートの暑さはこたえます。エベレストの冷涼な姿を思い浮かべながら働いています。(麻紀子)



少女マンガに出てきそうな似顔絵ですが、実物は違うんだなあ。(博)

発行所: ベルダレルネーヨ
ネパリ・バザーロ

247-0005 神奈川県横浜市栄区桂町274-15
第2中山ビル3階
Tel:045(891)9939 Fax:045(893)8254

1998年6月発行

編集責任者: 太田昌治

編集担当者: 土屋春代 土屋完二
廣田麻紀子 魚谷早苗
春山洋子 福田博

この通信は、再生紙、エコペーパー100で作られています。